

3ステップ

聞く トレーニング

自立と社会性を育む
特別支援教育

上嶋 恵

子どもの教育研究所 所長



3ステップ 聞く トレーニング

自立と社会性を育む
特別支援教育

上嶋 恵

子どもの教育研究所 所長



2を分けて
1を足して
2.5、7.1、9.3...

5	11	15	3	19	7



◎はじめに

『1分間集中トレーニング』（学陽書房、二〇〇八年）を書店に出していただくようになって、はや五年。読んでいただいた皆様に、心からお礼申し上げます。私に、多くのことを伝えてくれた子どもたちにも、あらためてお礼の気持ちを伝えます。

私は、教員時代も研修会講師を務めました。今でも講演依頼をいただくと、どこにでもありがたく出かけます。うれしいことに、どの会場にも、私の『1分間集中トレーニング』を机の上に乗せておられる方がいます。さらに、講演終了後に本を買ってくださる方も多くいます。

講演会後に本を買われた方の多くは、「今日は目からウロコでした。明日から早速教室で訓練をします」と言って帰られます。

先に本を読まれた方に共通することは、「お話を聞いてよくわかりました。でも、自分のイメージは少し違っていました」と、言われることです。

文章って難しいですね。世の作家がどんなに偉いか、よくわかりました。

それから、トレーニングについては「そんなに速いスピードで大丈夫ですか?」「そんなことが子どもにできるんですか?」という声が上がります。

これは、参加者に子どもたちと同じトレーニングを50分間で実施しているから起きる疑問です。大人より、子どもの方が柔軟で優秀なんです。そして、トレーニング終了後は全ての皆さんが、「いつ

もと違う頭の筋肉を使った」と口々に言って帰られます。

大阪の管理職研修会での講演後には、「これをまず、教職員にさせてみたいよ。僕の話をちっとも聞いてくれないからね」とこぼしておられる方もいました（でも、このトレーニングで、そのあたりの効果が出るかどうかは疑問です）。

みなさん、貴重なご意見を有り難うございました！

これらの幸運な出来事は、私に、これから（みなさんからいただいた貴重なご意見をもとに）「もっと使いやすく、わかりやすいトレーニングの本」を書きなさい、と言っているのだと考えました。

前作では、学習中の子どもたちが、実は「よく見えていない」「よく聞こえていない」ために集中できないのだということを述べ、その訓練方法をお伝えしました。

今回のこの本では、とりわけ「聞く」力に重点を置いたトレーニングについてお伝えします。

「聞く」トレーニングによって、子どもたちは集中できるようになるだけでなく、聞き逃しや聞き違いが改善され、聞くことに負担を感じなくなります。聞きながら書くことも、聞いたことを覚えることもできるようになりますので、学習により効果的な影響が現れるようになるのです。

つまり、子どもたちの聞き続ける集中力を高めることで聞きとれる時間が長くなり、理解できる量が増えるのです。

この「聞く」トレーニングをもっとやりやすく、わかりやすいものにするために、この本では、トレーニングを大きく3つの段階に分けてお伝えしていきます。

このトレーニングでは、まず「聞く」態勢をつくり（ステップ1）、確実な「聞き取り」ができるようにします（ステップ2）。そして最終的には、いつでもどんな指示にでも対応しながら活動できること（ステップ3）をめざします。

私はすでに、この「聞く」トレーニングを進めながら、どんどん変化する子どもたちの姿を目の当たりにしています。

あるお母さんからのお手紙の一部です。

「……息子は集中が続かない、指示が入りづらい、協調運動に問題があり、慣れないことは不安という状況で、1年生の時の音楽会は全く参加できませんでした。

補助の先生がついてくれ、参加を促してくれていましたが、結局、舞台に上がることをさえしませんでした。

ところが、2年生では今まで見たこともないような緊張の面持ちでの入場でしたが、しつかり舞台上がりました。そして、他のお子さんと同じように合唱し、振り付けつきの詩の朗読も出来ました。今年は舞台上上がるかなという思いで見ていた私は、息子の成長にびっくりし、うれしさで思わず目頭が熱くなりました。

上嶋先生から指導を受けるようになって、まだ三ヶ月ですが、まず先生からは集中すること、指示に従うことを教えてもらいました。

今までは苦手なことは避けようとする部分がありましたが、徐々に取り組もうとする姿勢が見受け

られるようになってきました。さらに、集中して聞けるようになってきたことから、内容の理解が進み、出来ることが増えてきた結果なのかなと思っています。……」

私の教室では、子どもたちに「聞く力」がつき、学習に成果が見え始めたら、自宅近くの学習塾に通うように勧めています。こちらの教室を卒業して。

つまりこのトレーニングは、子どもたちが、特別な配慮なしで学習可能になることを目標にしているのです。

特別支援や周りの温かい配慮と支えは、子どもたちには必要不可欠なことです。でももし、それらがなくても学習できるようになれば、子どもたちは自立し始めるだけでなく、これまでに出せなかった本来の力も発揮するようになるでしょう。

さらに、これまでお世話になった先生方への恩返しも可能になります。

支援する私たちは、子どもたちを変えなければなりません。どんな支援でも子どもを変えられないのでは、支援したことにはなりません。

このトレーニングの結果はどのようなのか、また子どもたちがその答えを教えてくれるでしょう。

二〇一三年 九月

上嶋 恵

序章

なぜ「聞く」力が必要なのか

- ◆ 目標は、みんなと一緒に学習すること 12
- ◆ 「聞く力」とは何か 13
- ◆ 「聞く」に注目した子ども観察二事例 15
- ◆ 就労に関わる力を育てるために 23

I 章

3ステップ「聞く」トレーニング

ステップ①「聞く」態勢をつくる 26

- ◆ 不真面目なわけではありません 27
- ◎ 床に寝るトレーニング 28
- ◆ 基本は「素直に聞く」力 29
- ◆ 行動をフィードバックする声かけ 31
- ◆ もっと楽に「聞く」ことが続けられるように 32

◎脱力トレーニング 33

ステップ② 確実な「聞き取り」 36

◆問題は、無意識のうちに動いてしまうこと 37

◆「寝る」と「着席」のトレーニングで相乗効果を 38

◎着席トレーニング(らくがき) 38

◎番号打ちトレーニング 42

◆より早くより正確に、最後まで 46

◎点つなぎトレーニング 47

◎〈おまけのトレーニング〉指示を変えた点つなぎトレーニングの例 49

◆よい指導者に必要な資質 50

ステップ③ いつでもどんな指示でも 54

◆「聞き続ける」「聞き取る」「理解する」ために 55

◆学力につながる「聞く」姿勢 55

◎数字の聞き取りトレーニング1 57

◆ポイントは「スピード」 60

◆指示そのものが「聞く」トレーニング 61

◎〈おまけのトレーニング〉黒板を使った特別支援トレーニング 62

◆ワンランクアップの「聞く」トレーニング 63

◎数字の聞き取りトレーニング2(さまざまな数字の聞き取りトレーニング) 65

◆読み上げにばかり気をとられず 67

◆より日常に近づけた「聞く」のために 74

◆ことばの聞き取りトレーニング1 75

◎「3文字ことば」の聞き取り 76

◆ことばの聞き取りトレーニング2 79

◎聞きながら書く「3文字ことば」1 79

◎聞きながら書く「3文字ことば」2 82

◆ことばの聞き取りトレーニング3 83

◎考えながら聞く「3文字ことば」1——1文字抜き 84

◎考えながら聞く「3文字ことば」2——2文字目スタート 85

◎考えながら聞く「3文字ことば」3——しりとりにく 87

◎考えながら聞く「3文字ことば」4——反対しりとりにく 89

◆聞いたことからすぐに考えるトレーニング 94

◎聞いて考える「反対語」トレーニング 95

◆学習へのめざましい効果 102

おさらい ステップ1～3の流れを通して 105

◆ステップ1で態勢を整え、ステップ2で受け入れの構えを 105

◆ステップ3で成功体験をつくる 107

II 章

向き合うことで指導法が見えてくる

◆ 子どもは本当は、学習が好き

109

◆ 子どもたちに何よりも必要な力

111

① 子どもたちの問題

抱える問題はさまざま

114

① できないことがあると泣いてしまう (小学3年生・T君)

114

② 気分次第で拒否してしまう (小学1年生・H君)

115

③ 多動はないが、学習内容を聞き取る力がない (中学2年生・R君)

117

④ しゃべり過ぎが高じていじめを受ける (中学1年生・M君)

120

⑤ 「見る」問題に加え、運動が苦手だったのに…… (小学5年生・N君)

124

⑥ 突然キレる、収まらない気持ち (小学5年生・F君)

128

⑦ 自分の存在が強く、対人関係に問題 (小学6年生・O君)

130

⑧ 文章を読んでも意味を考えない (小学3年生・S君とK君)

133

⑨ 知的能力は高いのに拒否行動の強い女の子 (3歳児・Y子)

137

② トレーニングの効果

行動改善から学習効果へ

141

◆ 効果の特徴

141

◆ 必要なのは行動の問題を見抜く力

147

③ 観察力トレーニング——ある子のトレーニングの様子から 149

- ◆ 学習前の様子からわかること 149
- ◆ ステップ①……基本的な「聞く」ことができるか 152
- ◆ スピードについていけるか 154
- ◆ 聞き逃しとマイペース、加えて…… 156
- ◆ ステップ②……条件に合わせた数字が書けるか 158
- ◆ ことばの作業は「聞いているつもり」 160
- ◆ ステップ③……聞いてさえいれば、できるのに 162
- ◆ 見ていない時は耳もふさがってしまう 164
- ◆ 観察結果をまとめてみると…… 168

④ 問題改善に必要なこと——本当に子どもを変える指導を 170

- ◆ 「聞いているつもり」「聞いているつもり」の子には 170
- ◆ 「読んでいるつもり」の改善には 173
- ◆ 将来の力へつなげる簡単な方法 175

ちよつとしたお話

- *「それ以外に理由はないんだ」 52
- *学力につながる「聞く」姿勢 92
- *みなさんのトレーニング 178

なぜ「聞く」力が必要なのか

◆目標は、みんなと一緒に学習すること

集中トレーニングは、本当に効果的な訓練です。

その効果を目の当たりにされた読者から、喜びのメールをいただくことが多くあります。時には、子どもは喜んで取り組んでくれるのだけど、このやり方でよいのか心配になってきました、という保護者や先生方からのメールもいただきますが、メールをいただく度に皆さんが真剣に取り組んでくれていることを嬉しく思います。

自分で言うのも何ですが、このトレーニングのすごいところは、いつもの普通の環境でできるところです。日頃、机に向かったとたんにだらけたり、他の事を考えたりしてしまう子どもでも、すぐにトレーニングを実施でき、効果も期待できます。

しかも、このトレーニングにはたいいていの子どもが、初日から乗ってきます。そして、これを経験した子どもたちにはいろいろなよい変化が現れます。私の教室では、今日までに二百人ほどの子どもたちがこのトレーニングを受けていますが、どの子にも効果は現れています。

そして、このトレーニングには終了日があります。終了した子どもたちの多くは、各地域にある学習塾に通って、さらなる学力向上を続けてもらっています。

つまり、このトレーニングの目標は、学習に特に問題のない子どもたちと一緒に学習するという本来当たり前のことなのです。

ところが、私の教室を訪ねてくる子は、それができなくてトレーニングを受けに来るのです。でも、トレーニング終了後は、他の子どもたちと普通に学習できるようになります。それでも苦手なことや好きでない科目はいつもあります。

また、終了期間には個人差があります。早い子は半年でトレーニングを終了しますが、多くは二～四年かかります。中には、「もう少しだなー」と感じる私と保護者の思いがピッタリ合わないまま終了したり、保護者の転勤で、やむなく終了した子どももありますが、どの子ども地域の塾での学習を続けています。

そして今日まで、ほとんどの子どもたちから高校入学、希望の私立中学入学という、嬉しいメールがもらえています。

◆「聞く」力とは何か

教室に来る子どもたちは、どの子もきまって聞き違いや、聞き逃しによるミスや多動行動や衝動的な行動によるケアレスミスが目立ち、集中にはムラがありました。初めから落ち着いている子どもは

皆無でした。この子たちにとって教室の先生の話は、まるでBGMです。話を聞き取るのではなく、聞き流しているかのような毎日だったと思います。

そんな子どもたちの中に、この習慣化しそうな聞き違いや聞き逃しなどの「聞く」力の問題が、予想より早く改善できるように感じる子どもたちがいます。

その子たちのその後はとてもスムーズで、驚くほど早く他の行動の問題も改善でき、成績もどんどん上がりました。

「早く改善できるように感じる」とは曖昧な表現ですが、聞こえの問題はなかなか数値化できないので、どうしても私の主観になってしまいます。それでも、「聞く」力が学習や行動に大きな影響を与えていることは確かだと思っています。

そんな確信を持ってトレーニングを進めながらも、「聞く」力の分析は簡単ではありません。

トレーニング中の聞き取りのノートは確実に正確になっていても、だからといって全ての聞く問題が改善できたとは言えないからです。聞き取り作業が上手になっていることは確かですが、「聞く」力は指示が伝わっただけでは完全とは言えないのです。

では、伝わる以外のどんな力が必要なのか。早く改善できたのはなぜなのか…。その点がどうしても気にかかり、何かもどかしいような思いがしていました。

そこで私は、子どもの行動観察の中でも「聞く」行動の種別に留意するようにしました。私の言うところの「聞く」が、何を指すのかをもう少しはっきりさせたいと思ったからです。

私の教室での、特徴的な「聞く」の問題を持った二人の子どもの様子をお話します。「聞く」力と何をどうする力なのか。この二人の行動をヒントに考えてみたいと思います。

※これは、個人の貴重なデータです。みなさんの心ある判断をいただければ、「聞く」力を考える資料の役には立てないと思います。みなさん、どうか、よろしく願います。

◆「聞く」に注目した子ども観察二事例

〈個別指導では問題ないのに……A君の例〉

小学5年生の背の高いA君は、発達検査では知的にとっても高い数値データの持ち主です。

保護者の主訴（困っている点）は、①クラスで学習ができない、②学校を嫌がる、この二点でした。

①と②は関連していて、問題は一つかもしれません。

A君が、誰もいないところで学習したいと要求したので、二ヶ月間だけ、つまり8回の学習だけ特別に個人指導することで合意しました。

A君は、初日から集中トレーニングの方法も、5年生の教科学習もとてもスムーズにこなします。

私の声に集中し、質問にも間髪入れず答え、算数の難問にも取り組み、私の方が解答で確かめるような難問も解きます。すごい頭脳！

2回目、3回目とても順調でした。どこにも問題は現れません。

ところが、4回目の学習から、低学年の男の子B君がA君の学習に入ることになりました。小集団

に慣れるためにはうってつけの条件です。低学年のB君は、インフルエンザで欠席した補充学習を受けるために来ただけで、特に大きな問題のある子ではありません。

トレーニングを受ける二人は、どちらも落ち着いて静かでした。ノートにも間違いはありません。低学年のB君がA君を気にする様子もありませんでした。

5回目も順調に終了。A君にはいつもお母さんかお父さんが付き添っていて、A君の学習の様子を最初から最後まで見ておられます。一方、低学年B君のご両親は、学習が終わる頃、教室に迎えに来ます（このような保護者の行動は、どちらでもよいことになっています）。

6回目、それまで特に問題のなかった二人に問題が起こりました。

集中トレーニングに1時間。その後、学年の教科学習に1時間。途中10分間ほどの休憩を入れますが、2時間で終わるのがここの学習スタイルです。

この日の休憩時間に、A君のお母さんは席を外しておられました。二人は並んでソファーに腰掛けながら、私に話しかけたりトイレに行ったりして休憩時間を過ごしていました。

ところが、突然、A君がB君を押し倒したのです！

ソファーの上ですから怪我はしませんが、押されたB君はもちろん驚いています。

見ていた私も、状況が掴めませんでした。

私は、驚いた表情は隠せませんでした、怒るのではなく、A君に何があったのかを尋ねました。A君は、うまくは説明できませんでしたが、その内容から、ちょっとしたジョークのようなつも

りでいることはわかりました。B君との距離が近づいたということでしょうか……。

でも、本当に問題を感じたのはその後でした。

戻って来られたお母さんに、このいきさつを説明しましたが、お母さんに驚く様子はありませんでした。もちろん驚かされたB君に謝ることもありませんでした。

行動に問題を持つ子どもには、悪いとわかっていてもやめられない時と、悪いことがわかっていない時があります。A君は後者ではないでしょうか。

そんなA君なら、周りの私たちが一つずつ教えなければならぬんです。そこに気付いておられない様子のお母さんの行動に私は不満を感じましたが、その日の学習を終えることにしました。

7回目の学習です。この日もA君とB君の二人学習です。

トレーニング中はよく集中しています。その後の学習は、二人に国語と算数のプリントをしてもらいました。二人とも、黙々と鉛筆を走らせています。

急にA君が「ここわかりません！」と言うので、「わからないところは後で教えるから、先に進んでみて」と声をかけました。

するとA君、「わからないところはここだけだから教えてください」と言うのです。よくできるA君のことですから、なるほどそうなのかもしれないとそばに行ったら、何と、その先は書いていません。わからないところで止まって私を呼んだのです。

「後で教えるから」と言う私の言葉を無視したのでしょうか……。仕方ないので説明しましたが、今

度は飛ばして先に進むように言って離れました。

やがて二人はプリントを終えて休憩に入りました。また、ソファーに並んで休憩です。

プリントを採点する私とソファーの距離は2メートル、二人の横にはA君のお母さんもいます。

その時突然、A君がB君の首を絞め始めたのです！びっくりした私はあわてて止めに入りました。もちろん、本気で何かに怒って、殺す勢いで絞めている様子ではありませんでしたが、B君の驚きは相当です。

でも、A君のお母さんの反応はあまりにも少なく、少しがっかりしているといった程度の表情を見ただけでした。多分、いつものよくある悪い行動の一つなのでしょう。

このA君の問題は、優秀な知性も、聞く力も、自分の行動に活かしていない点にあります。「学習中の問題を解くだけの知性」と「聞こえているけど反応しない聞く力」に加えて、お母さんのフォローも期待できない状態に問題があります。お母さんの問題については、それがたとえA君のどうにもできない行動が原因であったとしても、見逃せるものではありません。

この日は、お母さんと話しました。あの場面ではどうすべきだったのか、今後どうするのかについて話しました。

私はお母さん自身が変わる努力をしないなら、指導は難しいと伝えました。

でも残念ながら、A君とお母さんは、その日から来なくなりました。

私の保護者指導は未熟でした。

A君のお母さんと話している最中、私には頭のどこかに驚かされたB君のことがありました。A君とその相手、そしてA君の心情は熟慮しなければなりません。保護者と相対して話をするときは、保護者の心のありように傾注し、それに適ったアドバイスをしなければなりません。なのに私は、B君のことを考えていた。つまり、A君のお母さんの心に集中できていなかったのです。これがお母さんにも伝わったのではないのでしょうか。

そのために、『聞く』ということは、『聞き入れる』ということであることを、A君とお母さんに伝えることができませんでした。

「聞く」トレーニングは、人の声をただの音として聞くのではなく、「聞き取る」↓「聞き入れる」↓「理解する」という行動が伴わねばなりません。

「聞く」力は、人とのつながりのためにある力なのです。

A君の「聞く」力について、学習の中ではさして大きな問題が見られませんでした。それでも7回目の学習でA君が「ここわかりません!」と言った時の、「わからないところは後で教えるから……」という私の回答に対しての返答に、A君の他者の言葉を受け入れない、自分ペースの「聞き入れない聞き方」が見えました。

この行動から、A君は、自分の行動は重視、他者の考えや指示は却下する傾向があると考えられます。これまでの「聞く」行動で問題がなかったのは、私の指示や言動がA君の考えと対立していなかったためかもしれません。

私の言う「聞く」力とは、たとえ考えが対立していても、少し角度が違っていても、聞こえる言葉は素直に正しく「聞く」力なのです。でも、決して自分の考えや意見を殺して「聞く」ではありません。言葉や指示は「正しく聞き取る」ことが第一です。方法や考えや意見はその後のことなのです。正しく聞き取って、それをもとに慎重に考えたり、覚えたり、感じたりできなければならないのです。

〈言葉が思うように話せない、伝えられない、聞き取れない……C君の例〉

C君は大きな体ですが、とても謙虚で色白のハンサムな男の子です。

C君は、学習中「僕は何をしますか？」と控えめに聞いてきます。

でも私は冷たく「もう、言いました」とだけ答えます。

またしばらくすると、「僕は何をしますか？」と控えめに聞いてきますので、「僕は、次の学習の指示をちゃんと聞いて、みんなと一緒にするの」と言います。

他の子どもたちの作業が終わったのを確認して、指示を出します。

「では、次は先生の言うことばをそのまま書いてください。用意はいい？」『うなぎ、さくら、めだま、ゆかた、とんぼ、あした、うちわ、めがね』書けましたか？」

で、C君はどうでしょう。ノートを覗くと……おー、書いています！では、次に進みましょう。

「次は、先生の言うことばを書いたら、そのすぐ下にしりとりになることばを考えて書いてください。

3文字のことばですよ。

では、言います。『こども（待ち時間）、さそり（待ち時間）、らいと（待ち時間）、すずめ（待ち時間）、さんま（待ち時間）』

先生の言ったことばとしりととりと、両方とも書きました？」

どの子も上手に書けています。で、C君は？

キャー！ さっきの指示のまままだ！ 3文字言葉をそのまま書いただけ！

C君の耳は、いつもピンポイント聞き取りなんです。聞いている時と、全く聞いてない時があります。しかも、その聞いている時も針の先ほどだけだから問題なのです。

それでも、教室に來た頃に比べればだいぶよく聞けるようになっていきます。

当初のC君は、「名前を教えて？」と尋ねる私に「名前を教えて」と答え、「今は何年何組ですか？」の質問にも「今は何年何組ですか」と答える子でした。

でもこの質問も、自分が認識できるパターンだと答えられました。

「（お）名前は？」と聞けば正しく、名字からきちんと答えますし、「何年生ですか？」と聞けば「〇年生」と答えます。

ところがどっこい！ このピンポイント聞き取りのC君、音の高低は正確に捉えることができる聴音の天才だったのです。今でもピアノを習っているようですが、楽譜が理解できないC君は、先生の弾く曲を1、2回聞いただけで確実に覚えて両手で弾くのだそうです。

ある日の学習で、階名（ドレミ）を使ったワーキングメモリのトレーニングをしたことがありました。どの子もドからドまでの階名を間違わずに言えることを確かめた上で始めました。

ドレミと書かれた3音を見ながら、ドを1音上のレから始めて読むように指示します。子どもたちはドレミを見て、レミファと答えるのです。

実際には半音と全音があるので、シャープやフラットが必要になりますが1音ずつ上げ変えて読むだけの学習です（音楽の先生に叱られそうですが……）。聞いた数字を、1つ多い数字にしながらノートに書くのと同じ要領です。でも、どの子も四苦八苦していました。

この日の学習の最後は、階名で書かれたチヨウチヨの曲を全てを1音上げた音で読むことでした。ソミミ ファレレ……どの子も1音上げながら読むのに必死です。「頭が混乱するー！」と叫ぶ子もいました。

こんな騒ぎもどこ吹く風のC君には、この指示の意味はわかりませんし、みんなが何を騒いでいるのかも別世界の話。そこで、C君にはピアノの音の通りに階名で歌うように言いました。音を1音上げるという負荷はありませんが、弾いている鍵盤が見えないように、どんどん弾きました。

この後です。C君の能力に全員が感動したのは。

チヨウチヨの曲をミの音から始めても、ソの音から始めても、シのフラットから始めても、何の音から始めても、迷うこともなく、聞こえる音だけを頼りに階名で歌います。全て完璧に！

C君は一度も間違えませんでした。彼は本当に天才でした。でも私がもっと驚いたのは、その時のC君の表情と姿勢です。

「1音も漏らさず聞き取れるぞー！」というC君の慎重だけど自信のある表情。

それは、私が見る初めての表情でした。

けれど、音を聞き取ることに関しては天才のC君でも、音ではなく、言葉を、もつと多くのパターンの指示を聞き入れることを目標に学習しなければなりません。家族との会話や作業上の簡単な指示をもつと理解できなくては、社会人として生きづらくなるからです。

言葉を聞き取ることも、話すことも苦手なC君には、この先長い道のりになるでしょうが、今やらないとできないままになるかもしれません。

控えめで穏やかなC君のよさをなくさないように、トレーニングを続けたいと思います。

◆就労に関わる力を育てるために

A君やC君のように、「聞く」力の問題にはいろいろな形があるようです。

他にも、普段は全く聞けないけど、「静かな環境なら問題なし」「知ってる場所なら問題なし」「知っている人となら問題なし」「発達テスト中は完べき」「間に作業があるなら大丈夫」等々と、いろいろな形が見られます。

「聞く」力の目標は、どんな状態でも、つまりいつでも、どこでも、誰がいても誰とペアでも、「正しく聞いて、覚えて、理解し、自分の力が出せること」です。それは、**就労に関わる重要な力**になるからです。

またさらにもう少し細かく問題を見ると、説明を絵や文字や記号等の筆記ですると指示がよくわかる子や、ほとんど聞けているけれど作業終了後の指示は聞き逃す子、いくつかの指示を出されると聞

き逃す子、指示と合図の区別がつきにくい子などいます。

先の「聞く」力の問題よりももう少し小さな問題と言えそうですが、これが大きな問題になるのです。なぜかという、この問題は見逃されるからです。ある場面では聞き取れているために、改善されずに子どもだけが苦しむのです。

子どもたちの問題は、外から見えている問題だけに注目してはだめです。特に、聞こえの問題はわかりにくいので、私たち支援する者が、鋭い観察力を持たないとだめなんです。

子どもが、聞いていてもできないのか、聞き取れていないからできないのかを判別できなければなりません。また、どこまで聞いていたのか、どの部分から理解できなくなったのかを判別できないと、子どもへの助言も指導も、正しくできないことになります。

問題が見えた時に、「そこ！」と注意できるのが一番わかりやすいのです。

その瞬間に「そこ」を的確に注意できるように、これからご紹介するトレーニングをご自分で実践しながら、同時にそれに取り組む子どもたちの様子を注意深く見つめながら、鋭い観察力を養ってください。

I 章



3ステップ 「聞く」トレーニング

ステップ① 「聞く」態勢をつくる

ステップ② 確実な「聞き取り」

ステップ③ いつでもどんな指示でも

ステップ

1

「聞く」態勢をつくる

体の動きを止めて、耳だけを働かせるようになることを目標に行います。

◎床に寝るトレーニング



目的は、突然の指示にも正しく反応すること。
指示以外の声はできるだけ発しないで。

◎脱力トレーニング

リラックスして「聞く」に集中する態勢をつくる。
自分で自分の体を止められるように。



◆不真面目なではありません

「聞く」力が弱い子どもたちは、「聞く」ことだけに集中できなくて、聞いてはいても、自分も声を出してしゃべってしまうことがあります。これには、聞こえたことに関連のあることをしゃべらずにはいられない時と、内容に関係なく、とにかく口を動かして思ったことを話した時があるようです。また、「聞く」ことよりも他のことを考えている方が楽な子もいて、聞くことはたいがいにしておいて、頭の中を自由に動き回らせていることもあります。

このような子どもたちは、これまでに「聞く」ことに集中する習慣をつけられてこなかったか、またはある程度あった「聞く」習慣が崩れてしまったのではないかと考えています。

でも、けっして子どもが不真面目でこのような状態になったのではないことを、わかってあげてください。

「聞く」ことについてもう少し考えてみましょう。

私たちが重要なことを「聞く」時には、瞬間に体をじっと止めて聞きませんか？ 自分の体の動きさえ止めて、耳の集中を高めているのです。

「聞く」ことに弱さのある子どもたちには、この体を止めて「聞く」ことが苦手なことが多いのです。聞かねばならない時でも絶えず体が動いているのです。そして、時には口も動くのです。

そこで、トレーニングでは「聞く」ことに集中する習慣を身につけるために、体を止めることから始めます。

さつそくトレーニングを始めましょう。

でも注意してほしいことがあります。子どもへの注意ではありません。

初期のトレーニングでは子どもの声はほとんど必要としません。だから、部屋の中では指示を出す指導者であるあなた（保護者も含めて）の声のみが聞こえることになるでしょう。

静かな部屋に、指示の声だけが聞こえる状況をイメージしながら読み進めてください。指示することば以外はできるだけ発しないことが大切です。子どもにとって聞きやすい環境を作るためです。

あなた自身は、子どもの様子を見ることだけに集中してください。

◎床に寝るトレーニング

最初に、子どもたちに「床に寝る」ように指示します。

突然の指示に、子どもたちはどんな反応を示すでしょうか。この時点では、子どもたちには、おしゃべりも、頭の中の動きもあります。中には反抗も起こるかもしれません。

それらに気を取られ過ぎずにさらに指示を出します。指示以外の声はできるだけ発しないことを心がけながら進めてください。

「おへそを上に向けて、手を体の横に、両足を伸ばして、ただじっと寝るのよ」

子どもが正しい姿勢をとれていなかったら、あなたの手でそつと修正してやってください。